

太宰府市からJICAボランティアとしてモザンビークにきています。今回JICAボランティアとしての活動は4回目になります。最初は2009年9月からモンゴルで2年間、次が2012年6月からキルギスで2年間。それから、南米のガイアナという国で短期ボランティアをして、今回、2016年7月から2年間モザンビークです。

東京でコンピュータソフトウェアのエンジニアを長いことやっていました。定年になったら、海外で日本語教師をやろうと思って独学していたのですが、何も定年まで待つことはない、急に思いあって、オーストラリアの大学で資格をとり、オーストラリアのセカンダリースクールと呼ばれる中学高校がひとつになっている学校で外国語として日本語を教えました。5年ほどオーストラリアに住んで、そのまま永住しようか、とも考えたのですが、父の死をきっかけとして日本に帰国しました。

オーストラリアで日本語を教えるのは楽しかったのですが、私はもともとエンジニアですから、数学やコンピュータサイエンスを教えてみたい、と思うようになりました。日本語を教えるために学んだ教育学ですが、オーストラリアでの教員経験を通して、教えることの難しさと楽しさを実感したあと、日本語に限らず、私の中に積み重なったものを子供たちや若い人たちに伝えるノウハウを学んだように思いました。

それを試せる絶好の機会が、モンゴルでのボランティア活動でした。中学高校がひとつになった学校で、モンゴル人の先生達といっしょに「情報」という科目を教えました。コンピュータやインターネットが身近になった情報化社会で、そのテクノロジーとどう付き合っていくかを考える科目です。手探りの試行錯誤でしたが、それなりに手ごたえがあり、何かが伝わった気がしました。と同時に、私の中に新たに積み重なったものがあり、それをまた伝えたくて、次のキルギスでの活動につながりました。今度は大学でコンピュータプログラミングを教えました。

キルギスは、国語がふたつあります。ロシア語とキルギス語です。ソ連時代、キルギスはソ連の一部でした。ソ連崩壊後、ロシア語の強制力が弱まり、ロシア語ができない国民が増えました。しかし、キルギス語による教育体制は整わないままなので、国民の言語能力は不安定になっています。これはキルギスに限らず、植民地だった多くの国で同じ問題を抱えています。質の高い教育を受けるためには言語の壁がある、という問題です。

私が大学で教えるにあたって、もろにこの言語の壁にぶつかってしまいました。学生はロシア語もキルギス語も中途半端で、教える私は、にわか仕込みのロシア語と、片言のキルギス語しかできないわけです。これで何かを教えられるとしたら、それは何だろう、と考えました。ロシア語でしか教えられない先生達にはわからない、ロシア語ができない学生の気持ちが、私にはわかる気がしました。オーストラリアやモンゴルで、必ずしも言葉が通じない生徒たちに教えたので、言葉が通じなくても教える術がある、と思っていました。しかし、教育における言葉の役割をつくづく考えさせられました。

こんなことを書いていると、いつまでたってもモザンビークの話になりません。これから、モザンビークでの活動について、だいたい3か月ごとに報告しようと思います。その中で、他の国のことも少しずつ紹介できると思います。今までJICAボランティアとして出発する前に、市役所に挨拶に伺っていましたが、今回、ふるさとのみなさんに私の活動報告ができる場を設けていただいたことを

とてもうれしく思っています。

さて、モザンビークの国語はポルトガル語です。ポルトガルから独立したのが1975年。その後内戦が続き、それがおさまってから20年ほどたったところですが、国内の教育体制は今だ整っていません。世界の最貧国のひとつに数えられています。識字率は2008年の報告で54%。国語のポルトガル語がきちんとできるのは、全国民の20%ほどではないか、と言われていました。国内には地域ごとに異なる現地語があり、国語としてのポルトガル語教育はなかなか進まないようです。この状況は、キルギスと似ている、と思いました。

モザンビークでもキルギスと同じように大学で情報技術を教えるのですが、キルギスでの苦勞がきっと役に立つはずだと思いました。確かに、今、教え始めて、それを実感しているところです。それについてこれから詳しく報告していきたいと思いますが、それとは別に、私は小学校での基礎教育にも興味があるのです。キルギスで十分な国語教育を受けていない学生を相手にした経験から、教育の基盤となる共通の言語が如何に大事か、嫌というほど考えました。

日本で行われている絵本の読み聞かせ活動が、モザンビークでも有効なのは、と思い、太宰府図書館で行われていた、絵本の読み聞かせボランティアのためのセミナーに出たりしました。日本にはとてもいい絵本がたくさんあります。それをポルトガル語に訳して、現地語も交えながら、小学校を回って読み聞かせをやってみたい、と思いました。日本という遠い国の異なる文化を背景にしたお話を聞くと、そこに、それとは違う自分たちの世界が映るはずです。それを感じてほしい、その違いに価値があるのだと感じてほしい、その違いを意識して、言語を身につけてほしい、私のその願いを、日本の絵本がきっと媒介してくれると思いました。

こちらに来て、大学で日本文化に興味のあるイタリア人のロゼッタ先生と知り合いました。彼女はイタリア語を教えています、できれば、日本語のコースも設けたいと言うので、それなら、私が日本語を教えましょう、と言ったらとても喜んでくれて、さっそくコースを開設してくれたのです。その学生達と、絵本の読み聞かせ活動ができるかもしれないと思い、コースを始めるにあたって、学生達に、ひとつの目標として、いっしょに日本の絵本を読もう、と呼びかけました。

私のこのプランは、ロゼッタ先生も興味を持ってくれて、是非いっしょにやろう、と言ってきています。先日、市内の、他のJICAボランティアが入っている小学校に行き、読み聞かせをやってみました。絵本を読むよ、と言ったらざわついてきた子供たちが急に静かになりました。みんな絵本の前に集まって、きらきらした目でじっと見ていました。最初、日本語で読むからね、と言って読み始めました。子ども達はもちろん、日本語はさっぱりわからないのですが、静かに聞いてくれました。わかった？と聞いたらみんな首をふっていましたが、何かを感じた子もいたようでした。じゃ、今度は英語で読むよ、と言って読み始めました。英語は学校で教わっている、ちょっとわかるのです。わかった？ときいたら、うん、ちょっとだけ、という返事。言葉がぜんぜんわからなくても、絵と声の調子で、何かが伝わるのを感じました。次にポルトガル語と、少しだけシャンガナという現地語を交えて、読みました。私がシャンガナをしゃべると、みんなワッと声をあげました。そのシャンガナは通じたようでした。わかった？と聞くと、みんなうんうんとうなずきました。じゃ、だれか、このポルトガル語を読めるかな、と言ってみたら、一人の男の子が手をあげました。その子に読ませて、私は本のページをめくりました。彼は5年生くらいかな。ところどころ間違えたりひっかかったりしながら、一生懸命読んでくれました。

この子達に、もっとたくさんの絵本を読んで聞かせたいなあ、と思いました。ロゼッタ先生や学生

達が、小学校を回って日本の絵本の読み聞かせをやってくれたら、どんなにいいだろう、私が活動する2年間の間に、その体制を整えてその活動が続くようにできれば、と思っているところです。今、JICAを通して、日本から絵本の寄付をお願いしています。

私の本来の活動は、情報技術を教えることですが、基礎教育が確立していない状況で、専門技術の教育をすることは難しいです。それでも、今、モザンビークの大学で、キルギスでは感じられなかった手ごたえを感じています。それは、学生の学びたい気持ちと、私の教えたがうまくかみ合っている感覚です。これをキープしながら、どこまで行けるか、この学生達に2年間、教えてみようと思っています。その詳しい報告は、次回に回すとして、今回の報告の最後に、モザンビークへ来てから受けた語学訓練のことを紹介します。

私の先生は、中学校で英語を教えているアベル先生でした。子供たちのポルトガル語が現地語の影響を受けて、どう間違っているか、現地語が彼ら自身の間で如何に軽視されているか、を話してくれました。現地語はもっと重要視されなければならない、と彼は言いました。私もそう思うので、その話で盛り上がりました。二人で私の持ってきた日本の絵本を翻訳しながら、彼はシャンガナをちょっと教えてくれました。実は彼は北の地方の出身なので、南のこのあたりのシャンガナ語は彼の言葉ではないのです。でも、それを自分で勉強して、この地方出身の人達より、自分の方がシャンガナがよくなるんだ、と自慢してました。

写真は、語学訓練の最後にみんなで撮った記念写真です。同期で赴任した6人と先生二人が写っています。みんな、カプラナと呼ばれる布地で作った服を着ています。同期6人は同じ布地でつくったおそろいの服です。前列左が私、真ん中がアベル先生。アベル先生は偶然似たような柄のカプラナなので、すっかりおそろいに見えます。

では、次回報告は年末になります。

